

## 構 想 力 と 表 現

- ベルクソンの場合 -

紺 田 千 登 史

## I

ベルクソンの表現に対する見解は、われわれの内なる生を言語的表現へともたらず問題として、まず、否定的に表明された、といいうるのであろう。すなわち『時間と自由』は、われわれを取り巻く自然的ならびに社会的環境としての外部的世界において空間的に展開されるわれわれの通常の生のほかに、純粋に時間的に展開される内的な生が、すなわち、純粋持続として成立つ自由で創造的な生がもう一つありうることを明らかにしたのであるが、言語というものは本来、われわれの外部的世界の生活の必要から発明されたものであるため、これを表現することについてはまったくの無力であることが強調されたのであった。「われわれの存在は時間においてよりも空間において展開されている。われわれは自己と向かい合うよりもむしろ外部の世界と向かい合っている。われわれは考えるよりもむしろ語る」。(1) しかるに「非常にはっきりとした輪郭をもつ言葉、人間の印象における安定し、共通で、それゆえに非個人的なものを蓄積している粗野な言葉は、われわれの個人的な意識の繊細でうつろい易い印象を押しつぶしてしまうか、すくなくとも蔽い隠してしまうのである」。(2) ところで、『時間と自由』において言語がかようにはっきりと排斥されていたのに対し、『物質と記憶』になると一般観念の成立の過程などと合わせて、その位置づけなどが逆に追求されるようになるであ

らう。こうしたベルクソンの関心の変化は、かれ自身の哲学に何か根本的な方向転換ともいべき事態があったことを表わすものであろうか、それとも、たんにわれわれの日常的生の批判をさらに徹底しようとしたに過ぎなかったのであろうか。この間に対しては、J.イポリットの次のような思い切ったベルクソン理解が一つある。すなわち、J.イポリットによれば、『時間と自由』が『省察』において身心分離を行なうデカルトの抽象の努力と同様な努力によって持続を発見したのに対し、『物質と記憶』の目的は逆に、かような持続のわれわれの世界における実現を問わんとするところにある。(3) 「われわれの自由それ自身が有効な力であるのは、もっぱら、われわれ自身に属する何らかのものを物質の外在性の中へと移行させうる程度に応じてである。ベルクソンの『時間と自由』に対して人びとがなした批判の大部分は、持続と世界のあのような分離、その自由が美しき魂の自由にも似た純粋に内的な生を考える (concevoir) ことの困難さに関っていた。それというも世界におけるかような自由の実現の条件が、まさにそこでは考えられていないように見えるからである。しかるに『物質と記憶』が扱っているのは逆に、われわれの自由の物質的存在への挿入という、この問題なのである」。(4) ちょうど『第二批判』から『第三批判』へと移行するに当たって、カントが実践理性の歴史的世界への実現の問題を考えようとしたのと同様な事情をJ.イポリットは『物質と記憶』にお

(1) *Essai sur les données immédiates de la conscience* (以下 D.I. と略す). p.174.

(2) D. I., p.98.

(3) Cf. J. Hyppolite, *Figures de la pensée philosophique*, p.472.(4) *Fig. d. p. ph.* (傍線は J. イポリットのイタリック体の部分を示す). p.472.

いてみようとしている、といえる。ベルクソンにおいて、われわれの本来的な自由を限定するものは世界の中に置かれている身体の生活である。われわれの無限な意欲も、有限な身体を通じてこの世界に実現される他はない。『時間と自由』の内的生活、すなわち、ベルクソンのいわゆる純粹持続としての自由は、いわばまだ心情の段階にとどまっているのである。もっとも、ここでカントを引き合いに出す以上、ベルクソンがカントとその問題意識を著しく異にしている点を強調しておくことも忘れてはならないであろう。すなわち、『時間と自由』における自由は、カントの実践理性のもつ普遍性とは逆に、先刻引用したベルクソンの言葉にも瞥見せられる通り、どこまでも個人的なもの、個性的なものである、ということである。言語が退けられるのは、それらがもともと、空間に並置された対象を理解するための手段であり、それゆえ動的な持続を把握できない、ということとともに、他方、それらは対象の個性というものを一切排除する形でもっぱら抽象的、一般的にしか表現しない、ということがあるからであった。われわれがこうした言語をあえて人間の内面に適用しようとしても各人において共通のもの、せいぜい類型化できる側面しか捉えることができないのはむしろ当然のことなのである。いな、それどころではない。一般的に言って他人や自身を類型化し、固定的に捉えるということは、それがいかなる場合に行われるにせよ、その他人や自身を一定の範疇に閉じ込めてしまうことである。これはわれわれが社会生活を営む存在であり、通常、その中で果している機能や役割をもって自他を規定するものである以上、ある意味では避けられないことであるが、しかし一たび何らかの規定が与えられると、われわれはそうしたものを本当の自己と思い、また、そのように規定された他人を本当のかれ自身と看做してしまうのである。換言すれば、われわれは自他をそれぞれの属する何らかの範疇を通してしか見ず、人間が本来持っている筈のそれぞれに固有な創造性をみとめない、ということである。ここにわれわれの社会生活においてベルクソンがみ

とめる疎外の現象がある。ベルクソンがわれわれにたいして純粹持続に身を置き直すように言うのは、まず何よりもかかる疎外の現象に気づかせるためであり、また、同時にそれぞれに個性を帯びた自覚性としての自由を自覚させるためであった、といえる。それぞれの天分の自覚をともなった大いなる意気込みを引き出すこと、これが『時間と自由』においてベルクソンの目指したある意味では最大のテーマであった、と考えられる。そうしてこの考えはやがて晩年の『道徳と宗教の二源泉』において、ベルクソン独自の人間解放の理論にまで発展させられるであろう。

しかし大いなる意気込みといい、また、『道徳と宗教の二源泉』における偉大な神秘家達を心の奥底から動かす創造的情緒といい、それらにとどまる間は、J.イポリットの指摘する通り、まだ「美しき魂」の境地を越え出るものでないことも事実である。大いなる意気込みも、神秘家達によって誘発される開かれた社会に対する熱情も、われわれ人間の有限な現実においては、それらに具体的な形を与えていく作業が不可欠なものとして要請されている、といわねばならない。

## Ⅱ

しかしながら実をいえば、『物質と記憶』がJ.イポリットの主張しているほど端的に、われわれの自由のそうした実現の過程を追求しているわけではないであろう。『時間と自由』がわれわれの本来的なあり方をあくまでも示そうと努めたとすれば、『物質と記憶』の中心的課題は逆に、われわれの日常的なあり方、外に向かった意識のあり方の解明を行なう、ということにあるのであって、出発点が外界の知覚であれば最後に戻ってくるころもやはり外界の知覚である、ということだ。したがってJ.イポリットのいうような、自由がなぜ、またいかに物質の世界へと展開されていかなばならないか、といった問題意識をわれわれはこの著作の中に直接に見出すことはないのである。われわれがJ.イポリットのいわゆる自

由の実現、ないし具体化の考えをベルクソンにおいてさぐろうとすれば、それはむしろ後で見るように、『物質と記憶』出版の六年後（『物質と記憶』は1896年刊）に発表された論文で、「創造的構想力」の問題を扱った『知的努力』や、第三の主著『創造的進化』においてであろう。ベルクソンの言い方に倣っていうなら、『時間と自由』で確認された「事実の線」と『物質と記憶』で確認された「事実の線」のそれぞれを延長した場合に交差する点こそ、論文『知的努力』や『創造的進化』であり、自由の実現という観点からすれば『物質と記憶』は『時間と自由』と、『知的努力』および『創造的進化』との中間にあって、それらの橋渡しの役割を果す著作と考えたい。

しかしながらそれにしても、『物質と記憶』が『時間と自由』とはその扱う領域を異にしながら、どうしてそれが自由の実現の問題への橋渡しなどといったことが可能になるのであろうか。しかしこの間に答えるためには、その前にまずわれわれは、『物質と記憶』が『時間と自由』における方法とは異った方法を採用している点に注目する必要があるであろう。たしかに、G. ドルーズも指摘しているように、ベルクソンには（それがG. ドルーズのいうように、ベルクソン哲学の主たる方法といわれる直観に含めてしまってもよいかどうかはともかく）まず、具体的な経験から出発して、次第にそれを構成している本質的な要素にまで分析を進めていく、というどの著作にもほぼ共通の方法がある。<sup>(5)</sup> そうして『時間と自由』と『物質と記憶』を較べてみた場合でも、前者が出发点としての感覚の分析から持続と空間を、後者では外界の知覚の分析を通して、それに含まれる物質的なもの、すなわち、純粹知覚と、精神的なもの、すなわち純粹記憶を、というように、それぞれの経験に含まれる要素を抽出しようとしている限りにおいては共通の態度をみとめることができる。しかし『時間と自由』がかようにして抽出された要素

を単に切り離したままで置いているのに対し、『物質と記憶』では他方、あくまでも両者の相即し合う場面でも事態を捉えつづけていこうとしているであろう。そうしてわれわれがいま『物質と記憶』においてとくに注目したいのは、この後者の側面なのである。

さて、『物質と記憶』が精神的なものと物質的なものを相関的にとらえているということは、まず、知覚をパークリ風の観念論のいわゆる「表象」（une représentation）でも、实在論の「もの」（une chose）でもなく、両者のいわば中途（à mi-chemin）にあるものとベルクソンが定義づけたイマージュ（image）という語で言い直しているところに表われている、というのであろう。<sup>(6)</sup> 知覚の表わす世界は、科学者のどこにも中心というもののない等質的な世界とは異り、われわれの身体を中心に遠近法的に広がっている世界、われわれの関心によってすでに意味づけられている世界、ベルクソンのいわゆる身体の可能的行動としての世界である。換言すれば、科学者の世界が理論的客観的な世界であるのに対し、知覚の世界はあくまでも実践的であり、すでに主観の入り込んだいわば主観的・客観的な世界だ、ということである。ベルクソンはここでは知覚に限定して述べているのでただちに重なり合うものではないにせよ、それは西田哲学の「現実の世界」、すなわち、われわれがそこに生れ、そこで働き、そこで死んでいく世界にやがてはつらくなっていくような世界である、といてよいであろう。一言でいえば、それはわれわれの生物としての存在をとりまく環境的世界のことである。ところで、かような環境的世界の中において要請されている行動とは、さし当ってはわれわれに必要なものを取り込み、有害なものを退けるという身体の自己保存のための行動である。そして人間にあってとり分け特徴的なのは、環境に変化が生じてもそれに適応し、自己保存の要求を充すことができる、という柔軟な対

(5) Cf. G. Deleuze, *Le Bergsonisme*, p. 11.

(6) Cf. *Matière et mémoire*. (以下 M.M. と略す) p. 1.

応能力であろう。

われわれの適応の場面におけるかような柔軟さは、いったい、何にもとづいているのであろうか。ベルクソンによれば、それはわれわれの知覚がたんに瞬間毎に終結するものではなく、一定の幅をもっていること、いい換えれば現在の知覚は、直前の知覚の記憶を従えており、そのことによって知覚内容をより判明なものにするとともに、必要な場合にはさらに遠い過去の記憶をも再生し、身体的行動に対しつねに適確な指示を与えることができることによるのである。さらにこのことを別の言葉でいい換えれば、われわれの知覚は身体の可能的行動の世界として、すなわちさし迫った未来として空間的に広がっているばかりでなく、それが直前のものであれ、はるか以前のものであれ、過去を表象する (*imaginer*)<sup>(7)</sup> 能力によってつねに二重化せられているということ、この二重化の過程はなるほど身体的反応を遅延させるけれども、かように反応までに一定の時間があることによって、われわれはかえって変化しゆく状況に対しても妥当な反応を用意することができる、ということである。ところで、われわれのこうした適応のメカニズムのことをベルクソンは「生への注意」 (*l'attention a la vie*) という概念でいい表わそうとしていることは周知の通りであるが、内容からすればもっと端的に、構想力 (*l'imagination*) という語を使用してもよいのではなかろうか。事実、ベルクソンが知覚における主観と客観の相関関係を表現するために、わざわざイマージュ (*image*) という語を選んで言い直しているのも、われわれの知覚が原初的な形態においてではあるにせよ、まさに構想力の働く場に他ならないことを示そうとしたからである、と考えられるのである。構想力は現在を中心にあるときは小さな、あるときは大きな幅をもって働き、それに応じてイマージュも厚みをそのつど変化させるであろう。そしてイマージュの厚みが減少していくとき、われわれの知覚に対する反応

はたんなる反射的動作に委ねられることになり、逆に厚みを増していく場合、換言すれば現在に集中されてくる過去の領域が広がれば広がるほど、それだけ未来へと向けられる行動の射程も広がり、また、その適確さは増していく。ベルクソンは「行動的人間」 (*l'homme d'action*) とは過去の経験の現在へのこうした集中によって、その中より必要な経験を速やかに選び出す能力を備えた人間のことだ、と言っている。<sup>(8)</sup>

ところでこうした環境的世界の中で働くわれわれの構想力から、ベルクソンが特にとり出してくる要素は、身体の運動機構 (*le mecanisme moteur*) および表象的記憶 (*le souvenir-image*) と呼ばれるものである。運動機構は反復されるとやがてベルクソンのいわゆる習慣的記憶 (*le souvenir-habitude*)、すなわち、運動習慣となるが、表象的記憶はわれわれのその時その時の知覚が保存されたものであり、後になって記憶心像 (*images-souvenirs*) として再生されるものである。習慣の特色は同じものの反復であるのに対し、再生される知覚はそれぞれに特殊なニュアンスを伴い、相互に異質的なものである。むろん、構想力の具体的な働きの中では運動機構と表象的記憶はあくまでも動的に、しかも不可分なものとして結合しており、どこまでが運動機構の働きで、どこまでが表象的記憶の働きである、というように明確に分けることはできないであろう。それは運動機構に依存する一方で過去の具体的な記憶の援助をも受け容れているであろう。これらの要素の区別はあくまでも理念的なものである。しかしそれにもかかわらず、ベルクソンがこうした二つの要素を構想力の中から抽出しようとするのには、それなりの理由がなければならないであろう。そしてその理由とは第一に、現実に関わる構想力の極限を明らかにすることであり、第二にそのことによって逆に、構想力の中間的な性格を浮彫りにすることであった、と思われる。

(7) M.M., p.87, p.150.

(8) Cf. M.M., p.170, *Energie spirituelle* (以下 E.S. と略す) p.15.

さて、ベルクソンによれば環境の世界の中において生物が自己保存を全うするために必要なのは、知覚の中でもとくに類似の知覚である。そして類似の知覚が生物にとっていかに大切なことであるかは、例えば草食動物の行動を観察することによっても説明できることだ、とベルクソンはいう。すなわち、草食動物はかれらの環境の世界の中から、かれらの一定の要求ないし傾向性に応じるものとして、牧草一般をまず知覚する。いい換えれば、われわれ人類から見て種類の異った牧草であっても、それらがかれらの同一の要求を充たしうるものである限りにおいては、かれらにとっては同種の牧草であり、かれらに同じ摂取行動を取らせるのである。<sup>(9)</sup> しかも実をいえば、これと同様の事情は、われわれ人類においても原理的にはみとめることができるであろう。すなわち、われわれの知覚の所与はなるほど多様でありうる。しかしこうした知覚を受け容れる様々な感覚器官は、中枢を介してすべてが同じ運動器官に連結されている、という解剖学的な事実が他方にあるであろう。<sup>(10)</sup> そして知覚に現われるある種のものが、われわれの環境との適応過程においてつねに身体の同一の運動器官に同一の反応を促し、そこからいつも同一の有効な結果を引き出すことができるならば、そうしてやがてそれらに対する身体の運動器官の同一の反応形式が習慣として成立するようになるならば、逆に、そうした知覚の対象は一定の範疇に属するものとして分類されるようになるのである。「状況の多様性における態度の同一性」<sup>(11)</sup>としての、いわば生きられる類似の知覚、ないし生きられる一般性とも呼ぶべき事態がここに考えられるわけである。むしろ、人類における実際の類似の知覚は以上のようなことに尽きるものではない。上のような類似の知覚は動物の場合にせよ、人類において想定される

場合にせよ、すべて無意識的になされるものであり、しかもそれらは行動に直結していよう。しかるに人類における本来の類似の知覚は、意識的反省的であることを特徴とするであろう。というのも動物におけるのとは異り、そこにはつねに過去の知覚、すなわち表象的記憶の介入があるからである。もっとも、表象的記憶は習慣的記憶がもつたら類似をとらえていくのに対して、過去の一つひとつの知覚をその個性とともに保存し、再生するものであるから、それ自体としては類似よりもむしろ差異を強調するであろう。<sup>(12)</sup> 表象的記憶は日付をもっている<sup>(13)</sup>といわれるように、その典型的な場合はいわゆる思い出としての過去の再現である。しかし上の習慣的記憶のみにたよって生きられる生が人間において考え難いのと同様、こうした表象的記憶にひた切り切った生も実際には考えられない。そうした生のあり方がわれわれにおいてときたま出現することがあるとしても、それらはいずれも例外的な場合でしかないであろう。ベルクソンは前者の習慣的記憶のみに依存して生きる人間を衝動的な人間 (*un impulsif*)、後者のもつたら表象的記憶に生きる人間を夢想家 (*un rêveur*)と呼んでいるがそれらはいずれも人間の構想力の幅を示すための限界に過ぎないのである。<sup>(14)</sup> 『物質と記憶』の倒立した円錐の隠喩は有名であるが、上方に来る底面はすなわち夢想のレベルであって、表象的記憶はその個性において再現されるけれども行動との関係は絶たれており、反対に下の知覚の平面と接する頂点は身体の習慣的記憶を表わし、ここでは知覚が直ちに一般化されて行動に移行していくかわりに、当面する知覚の特殊性に対する配慮は一切なされないのである。しかしこの底面と頂点の間には極端な一般化も、極端な個別化も避けていくような類似の知覚の領域が、すなわち「知性的に

(9) Cf. M.M., pp. 176—178.

(10) Cf. M.M., p. 178.

(11) M.M., p. 179.

(12) Cf. M.M., pp. 172—173.

(13) Cf. M.M., p. 89.

(14) Cf. M.M., p. 170.

知覚される」<sup>(15)</sup> 類似の領域がある。これは上の習慣的記憶のみによる一般化が知覚の特殊性を一切踏まえない一般化であるのに対して、どこまでも具体的な状況に即しながらの一般化であることによって、人間的な適応の柔軟さそのものを表わす領域である、ということができる。すなわち、それは「『ほどよく均衡のとれた』精神」<sup>(16)</sup> の領域であり、まさにベルクソンの意味で良識 (le bon sens)<sup>(17)</sup> の領域なのである。

とはいえ、こうした意識的な類似の知覚がいかにか生活者としてのわれわれにとって重要な事柄であるとしても、それは一定の与えられた環境を前提とした、あくまでも受動的な適応を説明するにとどまるであろう。すなわち、類似の知覚において働く構想力とは、どこまでも知覚を過去の再生によって理解しようとするものであるから、正確には再生的構想力と呼ぶべきものである。過去とはかつて存在したもののことであるが、それはJ.イポリットもいうようにドイツ語の動詞 sein の過去分詞 gewesen に由来する Wesen が表わしている通り、ものの本質でもある。<sup>(18)</sup> そしてこのものの本質としての過去にわれわれの行動を導くようにさせるのが再生的構想力の働きなのである。しかるに人間的適応とはたんに与えられた環境に適応するというにとどまらず、みずから新しい環境を作り出すことによってそれに適応していく、という積極的能動的な側面をもっているであろう。いな、後者の創造的な適応こそ、むしろ、人間的適応の本来のあり方なのではなからうか。そして再生的構想力が過去からの心像の想起をもっばら行なうのに対していえば、ここでは未だ経験されたことのないものの想起が、いわば未来からの想起とでも呼ぶべき想起が新たに要請されることになるであろう。ところで、こうした未来からの想起をなすもの

こそ実は、ベルクソンのいわゆる「創造的構想力」(l'imagination créatrice)<sup>(19)</sup> に他ならないであろう。しかもわれわれの考えでは、この「創造的構想力」こそ、われわれの自由を実現していくものなのである。しかしながら、いま、直ちに「創造的構想力」の問題に入ることはできない。その前に、先に触れたように、『物質と記憶』が『時間と自由』と論文『知的努力』および『創造的進化』の橋渡しをしている、と述べた問題がまだ残っているからである。この橋渡しの問題とは結論からいえば、『物質と記憶』の再生的構想力の考えが持続の「創造的構想力」による限定という考えに導いていく、という主張になるのであるが、それは具体的にはいかなることを意味するのか、というところからまず、明らかにしていきたい。

### Ⅲ

さて、すでに見たように『物質と記憶』のベルクソンは、物質と精神を一応区別しながらも、他方、あくまでも両者の関連し合うところで事態を捉えようとしている点で、『時間と自由』のベルクソンとは大いに趣を異にしているのである。実際、『物質と記憶』のイマージュの議論をわれわれのように再生的構想力の議論として理解しようとする場合でも、その働きのどのレベルにおいても物質と精神は密接に関連し合っており、どこまでが物質でどこまでが精神だとはいえない状態になっているのである。あるいは知覚と協働する記憶心像が精神だといわれるであろうか。しかし心像が活力をもってくるのは実は、知覚や運動機構のお蔭であって、そこにもまた、物質的要素をわれわれはみとめないわけにはいかないであろう。<sup>(20)</sup> さらに極端に、夢想において過去の記憶がそのまま再現されるような場合はどうであ

(15) M.M., p.179.

(16) M.M., p. 170.

(17) M.M., p. 170.

(18) Cf. Fig.d.p.ph. p.482.

(19) E.S., p.187.

(20) Cf. M.M., p.170.

ろうか。この場合、たしかにわれわれは現実の世界に対する関心をもたず、純粹精神の世界に遊んでいるように見える。しかし夢想といえどもそれが表象である限りにおいては、運動機構、特に中枢における自動運動の介入があるであろう。つまり構想力として意識が捉えられる限りでは、どの点を取っても精神と物質の「中途」にあるものとしてのイマージュの定義は妥当する、ということである。このことを逆にいえば『物質と記憶』においては純粹という形容語のつけられるものはすべて無意識の領域に追いやられている、ということである。純粹知覚としての物質的世界がそうであり、純粹記憶もまたしかりである。むしろ、無意識は非存在を意味するものではない。われわれの知覚範囲を超えた世界の他の部分がたとえ知覚されずとも存在していることをみとめないわけにはいかないように、記憶もまた無意識の状態で存続しつづけている、というのがベルクソンの考え方である。<sup>(21)</sup> それらが無意識的なのは両者がともに全体を、いい換えれば物質的世界の全体、ならびに精神的世界全体としての全記憶を意味するからに過ぎない。身体をもつ存在にとっては、世界全体の知覚はかえってその行動を不可能にしよう。ちょうどそれと同様に、記憶の無差別な意識化は行動の立場から限定されなければならないのである。

ところで、こうした純粹知覚としての物質的世界や純粹記憶としての精神的世界は、メルロー＝ポンティのいわゆる『物質と記憶』の形而上学に属するものであって、<sup>(22)</sup> ベルクソンもこれらをいちおう仮説的な存在という形で示している。しかしベルクソンの哲学において形而上的なものがカントの物自体のように全く認識されることはないか、といえそうではない。『時間と自由』における純粹持続はある意味ではカントの物自体に相当するものであるが、<sup>(23)</sup>

それは困難ながらも経験可能なのである。いな、そうした持続に積極的に身を置くことこそわれわれの自由を意味したのである。持続は経験できるもの、ベルクソンのような言い方をすれば生きることのできるものである。ところで、上に述べた二つの形而上学的な概念のうち純粹知覚の問題はいちおう措くとして、純粹記憶の方は実は、持続の経験と同じ意味でならわれわれの経験となることのできるものではなかろうか。事実、ベルクソンも記憶心像として表象的記憶が知覚へと送り込まれてくるさいにはつねにわれわれの全記憶が現前している、と述べているし、<sup>(24)</sup> また、全記憶とは結局、われわれの性格に他ならず、それはわれわれの決心のあらゆる場合に現前して「われわれの過去の一つひとつの状態の顕在的な総合」<sup>(25)</sup> をなしている、とも言っている。むしろ、それはもはやイマージュではないであろう。イマージュの経験が心理学的生理学的経験であるとすれば、それはいわば形而上学的経験とでも呼ぶべきものであろう。しかしベルクソンの哲学においては、そうした形而上学的なものもある種の経験、すなわち、ベルクソンのいわゆる直観の対象となることによって、それとわれわれの現実の世界との関係を問うことも可能になっているのである。

しかしながらそれにしても、上のように全記憶の総合としてのわれわれの性格が、われわれの決心を導くというような言い方は、純粹記憶とは結局は純粹持続と同じものであることを意味することにはならないであろうか。ある意味ではたしかにその通りである。持続がわれわれの全過去と同義語であることは、『時間と自由』以来一貫して述べられていることである。<sup>(26)</sup> しかし持続がかように過去を背負いながらも不断に自己を新たにしていって創造的なものであることもまた、同時に語られていよう。そうして

(21) Cf. M.M., p.161.

(22) Cf. Merleau-Ponty, *L'union de l'âme et du corps chez Malebranche, Biran, et Bergson*. p.83.

(23) Cf. D.I., pp.174-180.

(24) Cf. M.M., p.115.

(25) M.M., p.162.

(26) Cf. D.I., p.128.

たとえば、『創造的進化』をふまえた論文『意識と生命』では、持続が過去の記憶であると同時に「未来の先取り」<sup>(27)</sup>という言葉でその未来性がはっきりと指摘されるようになるのである。そしてこのような持続の二面性という見地からすれば、純粹記憶とは結局、持続からその未来性を捨象してもっぱら過去の側面のみを取り出して述べられるさいに用いられる概念だ、ということになるであろう。しかもこのことは『物質と記憶』でわれわれが見出した構想力ともっぱら再生的に働くものであったところからいっても、ある意味では当然のことであったのである。持続のいわば受動的な面を限定してイマージュとして再現させるのが再生的構想力であり、『物質と記憶』はもっぱらこの問題を扱っていたのである。しかしそれでは持続の能動的な面、創造的な面を表現へともたらす問題、いい換えれば持続の積極的な側面としての自由を実現する問題はどこで考えればよいのであろうか。われわれの考えではそれこそ「創造的構想力」の問題なのであるが、テキストとしてはすでに述べたように、論文『知的努力』および『創造的進化』なのである。

まず、『知的努力』であるが、ベルクソンはこの論文で「創造的構想力」を考えるにさいして、かれ自身もいちおう再生的構想力の問題に立ち戻って議論を始めている。しかしこの論文では『物質と記憶』の中心的な課題であった知覚と直接に関連する議論からは離れて、記憶の「意志的想起」(l'évocation volontaire)<sup>(28)</sup>ともっぱら注目している。そしてこれは明らかに、『物質と記憶』が世界において多少とも偶然に遭遇する問題に対するわれわれの対応を考えていたのに対し、ここでは、われわれの側からする意図的計画的な行為を問題にしようとするところからくる違いである、といいうるであろう。歴史

的に言って、道具の発明や芸術の創作活動が最初のうちはまったく偶然的な機会になされていたに過ぎなかったとしても、今日の科学や技術における発明、発見、また芸術上の創作などはすべて、人間の意図的な活動にもとづいてなされているであろう。したがって、われわれがベルクソンにおいて考えようとしているように、これらの創造活動が持続の積極面の限定であるとしても、それは知覚における持続の限定のように、環境から働きかけられてはじめてなされるようなものではなく、これもまた、どこまでも意図的計画的な限定でなければならないことになる。ところで再生的構想力においてもまず、われわれはこうした持続の意図的な限定のモデルを見出すことができるのである。そしてそれこそまさに「意志的想起」に他ならないのである。

「意志的想起」は過去を過去として想起するものである限りにおいては、『物質と記憶』の夢想と同様である。しかし夢想においては記憶はその様々なイマージュの機械的な連合の運動にもっぱら委ねられているのに対し、「意志的想起」の場合は、われわれはあくまでもある特定の過去に限定して、これの再現に努めるのである。そしてベルクソンによれば、こうした努力の出発点に出現するのがかれのいわゆる「動的図式」(un schéma dynamique)なのである。すなわち、「動的図式」とは再現さるべき過去がまず最初、ある感情的な色合いをともなった一つの単純な表象として浮び上がってくる状態をいう<sup>(29)</sup>この表象にはやがて判明なイマージュとして実現されることになるような、あらゆる要素が相互に入り込み合う形で、不可分なものとして存在している。<sup>(30)</sup>むしろ、これはあくまでも端緒にしか過ぎない。「意志的想起」の過程にあっても、もしも途中でその努力が中断されるなら、記憶はたちまちのうちにその自動運動を開始して夢想状態に移行してしまうであ

(27) E. S., p. 5.

(28) E. S., p. 155.

(29) Cf. E. S., p. 167.

(30) Cf. E. S., p. 163, p. 164, p. 167.



ろう。夢想状態において出現してくる対象は様々であっても、それらはある意味ですべて同じものである。すなわち等質的である。それらは広がりにおいて増すかわりに表面的である。しかるに想起の努力が継続されている場合は、その努力の過程の各段階を通して再現されてくる対象が同一であっても、それぞれの段階におけるイメージは互いに強さと深さにおいて質的な発展を示す、とベルクソンはいう。「意志的想起」とは夢想のいわば水平運動に陥ることに対して抵抗する垂直運動の努力として成立つもの、ということができる。<sup>(31)</sup>

しかし問題は、この論文において初めて登場してくる「動的図式」というものの性格である。それはある意味では上でみたベルクソンの形而上学に属する純粹記憶の性格をもちながら、他方、限定された純粹記憶としては、われわれの現実との関りをすでに持った存在でもあるであろう。いい換えれば、それはベルクソンの形而上学とわれわれの現実をつなぐ媒介者の位置にある、ということである。むしろ、『物質と記憶』を論じたさいにも述べたように、純粹記憶は持続の過去の側面をもっぱら取り出しているに過ぎず、その意味ではここでもまだ自由の具体化が問題になることはありえない。しかしいま、持続の未来的な側面をもちながら、同時にその限定でもあるような「図式」がもしもあるとすれば、それこそ自由実現の鍵を提供するものではないであろうか。しかるに「動的図式」とは実は、ベルクソン自身にとってもそうした問題を解くことを目指した概念だったのである。すなわち、われわれが意図的計画的に何らかのものを新しく生み出そうとする場合、われわれが働かせるのはもはや再生的構想力ではなく、まさに「創造的構想力」でなければならぬであろう。創造活動は科学や芸術をはじめ様々な人間的活動においてみとめられるものであるが、し

かしどの場合においても、最初に出現するのはやはり「動的図式」である、とベルクソンは考える。むしろ、この「動的図式」はもはや過去からやってくるのではない。それは未来の先取りとしての図式であり、先にも述べたように、誤解を恐れずにいえば未来の記憶である。しかもこうした「動的図式」をイメージへと展開する努力が一度限りですむことはまれであろう。ケプラーが火星の楕円軌道を見出すまでにいかに多くの試行錯誤の過程が繰り返されたかをベルクソンも述べている。<sup>(32)</sup> つまり「創造的構想力」において出現する「動的図式」とは、さし当っては仮説として出現するものであって、それがいったん、イメージにまで展開されても、ケプラーの場合のように科学的発見にかかわるような場合には、事実と合致する合理的な「動的図式」が出現するまでいくどもイメージと図式の間の往復運動が重ねられ、修整が加えられていくのである。またベルクソンは文学における創作活動にも触れ、小説家や詩人によって生み出される人物らが、かれらの表現すべき「動的図式」としての観念、あるいは感情に逆に作用して文学における予見できない部分を形作っている点にも言及している。<sup>(33)</sup> しかしいずれにせよ、論文『知的努力』で述べられていることは、われわれ人間にとって表現ということがいかに大切であるかということであって、この表現の努力こそわれわれの生命の営みそのものであることが強調されるのである。<sup>(34)</sup> いな、それはたんに人間の生命のこのみにつくるものではないであろう。『創造的進化』は生命の世界全体もまた、あたかも予見不可能な作品の創造を旨としてなされる一つの広大な表現の努力を表わしているように見える、ということ、一つひとつの生物の種の形態はまさにそうした努力の生んだ独創的な作品の数々として考えられる、ということ、ただし、多くの種は生命がその表現の手

(31) Cf. E. S., p.166.

(32) Cf. E. S., p.176.

(33) Cf. E. S., p.176.

(34) Cf. E. S., p.190.

段として用いた物質の抵抗のゆえに、それを乗り越えてさらに前進することを妨げられているのに対し、人間のみが知性のお蔭でこうした障害をも克服できるただ一つの例外的な恵まれた種であること、これらのことを示そうとしたのである。われわれがみずからの考えをイメージ化するということは、ある意味で生命が様々な種として自己を実現してきたのと同じである。一たびイメージとして表現されると、それは判明な形態を与えられるかわりに固定化されるであろう。しかし他方、そうした表現の努力なしにはわれわれの思想は何ものでもありえないこともまた、事実なのである。「われわれが心の中に何を持っているか、ということは一枚の紙を取り出して、滲透し合っている諸項を（言葉として）相互に並置してみるときはじめて理解する」<sup>(35)</sup>からである。

しかしながら表現がこのように芸術や科学の領域でいかに大切であるかが判ったとしても、形而上学そのものにとって、はたして表現の問題がないのかどうかを、ここで改めて考えてみなければならないのではなかろうか。形而上学は文学や詩と同様、言語を介して表現される。しかるに形而上学に関しては『時間と自由』以来、ベルクソンは終始その言語的表現に限界のあることを主張しつづけた、というのが本当のところなのである。しかもわれわれにとって奇妙なのは、ベルクソンがかように言語を批判し、形而上学的思索からそれを排除しようとしながらも、かれ自身はもっぱら言語を通してみずからの思索を表現しようとしてきた、ということである。形而上学と言語は、ベルクソンにおいていかなる関係にあるのか。言語を拒否しながらも、なお、それを通して形而上学を表現しようとしたベルクソンの言語とはいったい、いかなる種類の言語なのか。

## IV

ベルクソンが言語の本質について本格的に検討をはじめるのは『物質と記憶』からである。それは先刻みた類似の知覚が、言語やそれが表現する一般観念と深いかわりをもっているからである。ところで、ベルクソンによれば、われわれが言語や一般観念を考えるにさいして最初に出合う難問は次の循環論である、という。すなわち「一般化するためには抽象しなければならないが、しかし有効に抽象するためには、すでに一般化ができる状態になっていなければならない」<sup>(36)</sup>という堂々めぐりである。そしてベルクソンは、一般観念に関する唯名論と概念論の議論は、まさにかような循環そのものを表現している、というのである。唯名論の場合、かれらがもっぱら注目するのは概念の外延、換言すればそれに含まれるはずの多数の個物だけである。そして概念の統一性とはさまざまな個物が無差別に同一の語で呼ばれることにもとづくに過ぎない。しかしかりに事態が唯名論の主張する通りであるとしても、なぜ、いくつかの個物がある語で表現され、他の個物が別の語で表現されるのか、これだけでは説明がつかないであろう。というのもいくつかの個物が一つの語に包括され、他のものが他の語に包括される以上、それぞれの個物は一つの語にまとめられるための何らかの共通性をもっている、と考えざるをえないからである。そしてここで唯名論はおのずから内包を考えないわけにはいかなくなってくる。しかるにかような個物の共通にもつ性質から出発して概念を考えていこうとするのが概念論の立場である。かれらは唯名論とは逆に、各個物が全体としてもつ性質を様々な部分的性質に分け、その一つひとつが一つの類を代表する、と考える。しかし問題は、抽象の努力によってかように各個物より分離せられた性質のおおのにおに、それぞれ一つの語を与えていくためには、精神は新たな努力を始めなければならない、というこ

(35) E.S., p.22. なお ( ) 内の語は筆者が補った。

(36) M.M., p.174.

とである。なぜなら、たとえば「百合の白さと雪原の白さとは同じでないからである」<sup>(37)</sup>。しかもこれらをなお、同じ語で表わそうというのであれば、われわれはふたたび唯名論の出発点であった、様々な個物よりなる外延という考えに立ち戻らざるをえないことになる。しかしベルクソンによれば、こうした循環が生じるのは、唯名論も概念論ともに「個物の知覚」<sup>(38)</sup>を出発点としているためなのである。すなわち、唯名論は枚挙によって、概念論は分析によってという違いはあるにせよ、二つの議論はともに個物の知覚が最初に与えられているかのごとくに考えている、ということである。しかしそうではない。われわれが言語や一般観念を考えるにさいしても、つねに忘れてならないのは、われわれはまず、なによりもみずからの生命の維持を考えざるをえない生活者である、ということである。「まず生きること」<sup>(39)</sup>である。そして生活者にとって大切なのは個物の知覚よりも前に類似の知覚である。草食動物がいかにもみずからの食物としての牧草を見分けるかはずでに見た。また、われわれ人類において身体の運動機構において形成される習慣がいかなる原則にもとづいて知覚を分類するかも見た。ところでわれわれの知性はこうした運動機構に形成せられる習慣を模倣して無数の個体に対応するための一定数の運動装置を身体に作り上げてきたのである。そうしてこれこそ、われわれの「分節された言語」<sup>(40)</sup>に他ならない、とベルクソンは言う。むしろ、言語も「良識」における運動機構と同じように、通常は個物とかかわる表象的記憶との均衡の上に成立しているであろう。言語はたしかに一般観念を表現するが、一般観念自体はあくまでも運動機構と表象的記憶との間をゆれ動く動的な存在なのである。ベルクソンは「物質と

記憶』で一般観念を論じるさいに再度、円錐の隠喩をもち出して、一般概念は表象的記憶の底面にも、身体的行動の頂点にも固定されず、両者の間をたえず運動し、われわれの意識に対し、当面する行動と有効に協力できるように、十分な観念と十分な記憶心像を提供する<sup>(41)</sup>と述べているが、これはまさに、われわれの一般概念が、知覚における構想力の働きと結局は重なり合うものであることを意味するであろう。

しかしそれにしてもなぜ、言語のような人為的な体系をわれわれは作り上げてきたのであろうか。実をいえば、各言語が人為的な約束にもとづく多少とも偶然的な性格をもつとしても、われわれが言語をもつこと自体は決して偶然的ではないのである。「人間にとって語ることは歩くことと同様、自然なことである」<sup>(42)</sup>とベルクソンは言っている。それはわれわれが本来、社会的な存在だからである。われわれが互いに協力し合うためのコミュニケーションの手段ということがまさに言語の第一の機能なのである。言語が表現する事物は、われわれが共通に必要とするものとして実在の中より切り取ってきたものであり、また、言語が指示する事物の諸性質は、われわれの協働に対する呼びかけである、といわれる<sup>(43)</sup>。そうして類似の知覚と同様、事物から暗示される行動が同一である場合にはつねに同じ語が用いられ、逆に同じ利益、果すべき同一の行動が同一の語を喚起する場合には、いつもわれわれの精神は異った事物にも同じ性質を付与し、それらを同じ仕方ですくい浮べるとともに、同一の観念のもとに分類するようになるのである。もっとも、ここで言語がたんなる身体の習慣にもとづくに過ぎない類似の知覚を著しく超えている点も見逃してはならないであろう。それは上で見たように、言語がわれわれの「良

(37) M.M.,p.175.

(38) M.M.,p.175.

(39) *La pensée et le mouvant* (以下 P.M. と略す),p.54.

(40) M.M.,p.179.

(41) M.M.,p.181.

(42) P.M.,p.86.

(43) Cf. P.M.,p.87.

識」として成り立つ動的な一般観念をも表現するところにすでに現われているが、言語の一般的な性格としてわれわれがみとめることができる「動性」<sup>(44)</sup>ということである。

いったい、われわれが言語を通して他の人びとと協力し合う、と一口に言っても、それは原始社会において考えられるような、たんに与えられた環境から、われわれに必要なものを採取するという労働につきるものではなく、大部分は、人為的に環境を作り直し、そのことを通じて自然な状態で得られるより以上の生産物を獲得したり、また、自然な状態では存在しなかったような新しいものを次々と生産していく労働なのである。ところで、このようにして絶えずわれわれの環境が変化していく以上、われわれ各人のたずさわる仕事の内容も当然のことながら変化していかざるをえないであろう。しかも、こうした社会におけるわれわれの労働は互いに交替可能な分業として行なわれ、蟻や蜜蜂の昆虫社会のように役割は固定してはいない。ところでかように変化していく仕事の内容や役割に言語が対応していくためには、言語を構成する語が無限なものではないので、それぞれの語は、習慣的記憶だけにもとづくとした場合の類似の知覚のように、一定の対象に限定されることなく、かえって種々な質的に異なる対象や役割にも対応できるものとならなければならないであろう。そして、実際、各記号の表現する対象が次々に移行していくというこうした傾向こそ、ベルクソンによれば人間の言語を特徴づけている点なのである。<sup>(45)</sup>例えば、片言をしゃべりはじめた幼児の言語を考えてみる。かれは覚えただけの言葉を途方もなく偶然的な結びつきや、大人には考えられないような類比でもって、その語とともに最初に指示された対象とはまったく無関係と思えるような対象にまで広げて使用することがあるであろう。言葉は何でも表現す

る、というのが幼児言語の原理である、とベルクソンは言う。<sup>(46)</sup> むろん、言語も一つの習慣の体系であるかぎりでは、各語の用法には他の語との関係で相対的に決まってくる一定の適用範囲というものがあり、言語の動性といっても、そこにはおのずから制限はあるであろう。しかしながら他方、かような適用範囲もまたいつでも新しい用法によって取って替わられるものである、という観点からすれば、言語は権利上無限の動性をもつ、といえるであろう。しかも言語の動性はたんにそれが表現する外界の対象から対象へと、いわば水平的に移行するのみならず、次第にわれわれの内面にも入り込んで、外界の対象からその対象の記憶へ、また、対象の明確な記憶からうつろい易いイメージへ、そうしてイメージからさらにはこうしたイメージを表象する作用の表象としての純粹な観念をまで表現できるようになるであろう。<sup>(47)</sup> 「言葉は動的であり、一つのものから他のものへと進んでいくというただそれだけの理由で、知性は早晚、言葉を（かような動きの）途中で捉え、（もはや）ものでない対象、それまでは身を隠して闇から光へと引き出されるために、言葉の援助を待ち望んでいた対象に（も）適用することになったに違いない」<sup>(48)</sup>といわれる。知性は本来、生活者としてのわれわれの環境的世界に向けられた意識であるにもかかわらず、かような言葉の動性を通して、次第に自己意識を獲得する過程がここにみとめられるのである。デカルトは理論的に確実な世界認識をえるために、方法的懐疑においてまず、感覚の確実性を疑い、記憶や想像力を疑い、さらに悟性まで疑った後で、逆説的に「考える自己」の存在の不可疑なことを自覚するのであるが、ベルクソンのような考え方からすれば、それはある意味でわれわれが言語をもった時点から開かれていた道だったことになる。もっとも言語が自覚において果す重要な

(44) *L'évolution créatrice* (以下 E.C. と略す) p.159.

(45) Cf. E.C., p.159.

(46) Cf. E.C., p.159.

(47) Cf. E.C., p.160.

(48) E.C., p.161 (傍線はテキストのイタリックの部分、( ) は筆者の補った部分を示す)。

役割をかように指摘しながらも、それが元来、われわれの環境としての物質の世界に対する適応手段の一つであるかぎりにおいては、自覚内容の表現にあたって、限界のあることもベルクソンは指摘している。それは「言葉がこうした（内的な）対象を包摂しつつも、なおそれをものに変えてしまう」<sup>(49)</sup>からである。いい換えれば、言葉というものは、われわれの内面と接点を見出す場合でも、それはまず、なによりも「知性がものにみずからを固定する働きの表象」<sup>(50)</sup>としてであって、かようなもの相互の関係に対応する形でそれ自身も明晰、判明な性格をもち続ける、ということなのである。デカルトが自己の自覚に到達したあとで、この自己を「考えるもの」と規定して以来、幾多の議論を呼んできたが、この事実こそ、自覚の言語的表現の困難性を象徴している、といえるであろう。しかしながらひるがえって、自覚とはたんにわれわれの意識の内面を反省することに尽きるであろうか。

たしかにベルクソンは持続や、それを通してさらに生命の世界全体を動かしている原理にも直接し、それらと合一する直観を形而上学の仕事として強調している。しかしながら、他方では、すでにみてきたように、それらはわれわれの現実の世界へと具体化されることなしには、われわれにとって何ものでもありえない、とも述べているようなのである。この形而上学的なものの具体化とは、形而上学が直観するものを限定してイメージ化していくさまに構想力の働きであり、それは表現行為としてまさに実践を意味しよう。ところでいま、こうしたベルクソンにおける形而上学的なもの、その表現の問題を順序の観点からみると、実は、われわれが個別的な表現行為に触れることがむしろ先であって、形而上学的なものはそれらから遡って次第に共通の発出源を探りゆく場合に、それらがいわば収斂する点として現れるようには見えないであろうか。様々な具体的な選択の場面に直面した経験から、われわれは重要な決心には予めそ

れを捉すような確たる動機を見出すことはできないこと、それら一つひとつの決心がわれわれの予見不可能な人生を形成してきた、という意味で、それぞれが創造行為にも類する選択であったこと、そしてそのさいのわれわれの意識状態を反省してみると、それがまさに過去を不可分な全体として孕みつつ不断に未来へと絶えず質的な変化を見せながら流れゆく時間、すなわち、持続であることを発見するのである。また、生命の世界を根本から動かしていると言われる原理、すなわちエラン・ヴィタルにしても『知的努力』におけるような「創造的構想力」の事実が発点となって、それとの類比にもとづいて考えられている、といえるであろう。すなわち、「創造的構想力」は「動的図式」をイメージへと展開するが、それと同じように生物の様々な形態が一つの創造行為の結果展開されたものと考えられて、生物学の多くの実証的データを踏まえながら、次第にそれらの根源を模索していく、という方法が取られているのである。つまり、エラン・ヴィタルは『物質と記憶』の純粋記憶などと同様、さし当ってはわれわれの考えるもの、一種の要請、ないしは神話なのである。われわれが当面、経験できるのは、あくまでもわれわれにおいて働く個別的な構想力の事実だけである。もっとも、われわれの創造的な営みの一つひとつが、生命の普遍的な方向に合致するという信念が獲得できるならば、そのことによって、われわれはそれぞれ個別的な営みにたずさわりながらも、そこに大いなる連帯感と励ましを、新たな歓びを見出すであろうことは疑いのないところである。ベルクソンの形而上学はわれわれのあらゆる領域における創造的な活動を補完し、促進する形而上学として構想されている、といえる。ベルクソンの最後の著作『道徳と宗教の二源泉』は仏教やキリスト教の愛の立場、すなわちエラン・ダムールに人類の希望を見出そうとしているが、これは、『創造的進化』を発表後、第一次世界大戦を経験したベルクソンが、

(49) E.C., p.161, ( ) 内の語は筆者の補った語を示す。

(50) E.C., p.161.

国際連盟の一機関であった「知的協力委員会」の委員長として世界平和の実現に向けてかれなりに積極的な努力を惜まなかった経験が出发点となっている、といいうるであろう。「行動的人間」としてのベルクソン自身のこうした具体的な活動と思索がかれに近代国家の限界を痛感させるとともに、それを超えるような立場を新たに求めさせたのである。しかしいずれにせよ、ベルクソンの形而上学の背後には人間的実践、すなわち、構想力の具体的な裏づけが

ある、ということは見逃がしてはならないことであろう。そうしてあるときは思想のイマージュへの実現の努力を直接に語り、あるときは形而上学の世界にまで大きく飛躍することによって、いわば、イマージュ実現の努力の原型とでもいうべきものを考え、前者と二重写しにして表現しようとするのがベルクソンの言語である、といいうるであろう。ベルクソンの言語は構想力の言語、すなわちイマージュ言語 (le langage image)<sup>(51)</sup> なのである。

---

(51) P.M., p.42.